

## スペインに於ける日本語教育

乾 英 一

1986年度在外研究員として久し振りにスペインに長期滞在したが、かつて留学していた頃（1974—78年）に比べ、駐在員事務所や支店をもつ日本の企業数は驚くほど増え、更に、昨今のスペイン・ブームとやらのせいだろうか、観光客は言うに及ばず、留学生の数も随分増えたことが感じられた。特に、1986年1月のスペインの EC 加盟前後には、スペインに進出した日本企業数は飛躍的に増加し、その結果、現在ではマドリードとバルセロナに、駐在員たちの子弟教育の為、日本人学校が開設されるに到っている。首都マドリードはともかく、何故バルセロナに日本人学校が、と思われるかもしれないが、実は、このバルセロナを中心とするカタルーニャ地方は、北のバスク地方と並んで、スペインでは最も早くから工業化が進んだ所で、その経済力は、今や、他の地方を圧倒していると言っても過言ではない。正確な数字はないのだが、一説に拠ると、日本企業の約80%がこのカタルーニャ地方に集中しているという。現在のスペインの政治形態は議会君主制であるが、地方自治制が取り入れられており、EC 加盟を目前にした1985年には、中央政府首相フェリペ・ゴンサレスが来日しただけでなく、カタルーニャとバスクの自治政府も財界人を中心とする大代表団を日本に派遣してきた。特に、カタルーニャからは、地方自治政府首班ジョルディ・プジョール自らが来日している。いずれも、狙いは日本の企業進出、資本投下、技術提携などにあったことは改めて言うまでもない。

こうして日本の企業の進出が目立ってくれば、当然のこととして、日本

に対するイメージや関心も変化してくる。それが具体的にどういうことなのかは、あまり確かな形ではわからなかったのだが、こんなことがあった。マドリードに古くから顔馴染みの書店がある。ここは英語とフランス語のセクションがあって、留学生を中心として外国人の数もかなり多い。店内には二カ所掲示板があり、様々なはり紙がしてある。「英語教えます」とか「フランス語家庭教師求む」といった類が殆どだが、その中に「日本語の教師求む」というのが幾つかあった。よく考えてみれば、別に不思議がるようなことではないのだが、これを見つけたときには「あれ」と一瞬戸惑いに似たものを覚えると同時に、「随分変わったなあ」という感慨をもった。十年前には、私には想像できなかったことだからである。出発前に、語研日本語科の同僚から、ついでのときにスペインに於ける日本語教育の実情を調べてきて欲しいと頼まれてはいたのだが、ここに到って俄に興味湧いてきた。そこで、日本大使館の柴田文化担当書記官に会って大体のところを聞かせて貰い、次いで、各機関で担当者全員に面会し話を聞いた。以下はその報告である。

## 1. 日本語教育史

マドリードの国立語学学校日本語科がかつて発行していた「東雲」という小冊子がある。現在日本語科の科長を勤めるラミロ・ブラナス氏の御厚意で、1979年から1981年までの3冊を入手することができた。ブラナス氏に拠ると、この3冊しか発行されなかったそうであるが、その第1冊目にあたる1979年号に、「スペインに於ける日本語教育 *La enseñanza del japonés en España*」という短い一文がある。著者名はない。時期的にみて、近藤仁之氏が熊本洋氏の手になるものではないかと思うが、全く推測の域を出ない。それはともかくとして、まずこれに従って、スペインに於ける日本語教育史を追ってみることにする。

スペインに於ける本格的な日本語教育は、1970年頃にマドリードのホテ

ル学校 (Escuela Superior de Hostelería) で近藤仁之氏が半年間の日本語コースを担当したのが始まりのようである。受講者は約20名。翌1971年に、マドリード・アウトノマ大学の「アジア・アフリカ研究所」で、日本語を開講。担当者は近藤仁之氏とラミロ・プラナス氏。翌1972年からは近藤氏が中心となり、同年の受講者数も39名に達したが、様々な理由から、この「アジア・アフリカ研究所」での日本語教育は長続きしなかったという。同じく1971年には、バルセロナの国立語学学校で日本語科が新設された。担当者は松浦惇一氏。一方、マドリードの国立語学学校では、1975年の2月から5月にかけて試験的に日本語を開講したところ、当初の30~35名という予測を裏切って受講希望者が殺到し、登録受け付けを早々と締め切るほどで、これが引き金となって、同年秋に正式開講されるに到った。試験的講座の担当者は近藤仁之氏とラミロ・プラナス氏であったが、正式開講となって、新たに熊本洋氏が派遣されスタッフに加わった。松浦惇一氏に拠れば、バルセロナ校の日本語科の開設は言わば自然発生的だが、マドリード校の場合には、日本大使館の意向と後押しがあったという。

「東雲」1980年号には、熊本氏が1975年から1980年までの学生数の推移を表にして発表している。貴重なデータであるので、ここに転載しておく〔表一1〕。尚、( ) 内の数字は男子学生を示す。また、松浦氏にはバルセロナの国立語学学校日本語科の実情をまとめた「覚書 Memoria (1983年)」があるが、ここに1971年の開設から1983年までの学生数が載っている。これも転載しておく〔表二〕。尚、alumnos oficiales と alumnos libres とあるが、これは国立語学学校の制度で、oficiales は授業に出席する権利があるが、libres は出席できない。試験を受けるだけである。国立語学学校は職業専門教育の中に位置付けられており、卒業証書に相当する「技能証明書 Certificado de Aptitud」を取得することは決して易しくなく、それだけに、社会的評価も高い。そこで、仕事などの都合から授業に出席できない人や、また、すでにその語に通じていて「技能証

表—1 Desarrollo del alumnado en nuestros cursos de japonés  
(Entre paréntesis, alumnos varones)

cursos \ año esc.	1975 (experiment.)	1975-76	1976-77	1977-78	1978-79	1979-80	1980-81
1º.	39 (21)	62 (20)	54 (21)	60 (29)	59 (16)	66 (32)	74 (34)
2º		9 (8)	29% de promoción 18 (6)	33% 18 (5)	40% 24 (5)	34% 20 (7)	41% 27 (11)
3º			122% 11 (8)	56% 10 (2)	56% 10 (4)	41% 10 (2)	80% 15 (8)
4º.				45% 5 (4)	50% 5 (1)	70% 7 (3)	80% 8 (1)
4º. Especial (5º.)						60% 3 (0)	86% 6 (1)
Total	(53%) 39 (21)	(39,4%) 71 (28)	(42%) 83 (35)	(43%) 93 (40)	(26,5%) 98 (26)	(44,8%) 106 (44)	(42,3%) 130 (55)
Porcentaje respecto al año anterior			116%	112%	105%	108%	122,6%
Porcentaje por cursos							
5º				5,4	5,1	2,8	4,6
4º				10,7	10,2	6,6	6,2
3º			13,3	19,4	24,5	9,4	11,5
2º		12,7	21,7	64,5	60,2	18,9	20,8
1º.		87,3	65,0			62,3	58,9
		100,0	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0

Este cuadro ha sido elaborado por el Profesor Kumamoto. Se incluyen en él únicamente los alumnos oficiales.  
(Se prescinde del curso de verano impartido en 1977, al que asistieron 28 alumnos — 17 varones y 11 mujeres —)



表—2 ESTADISTICA DEL ALUMNADO DE LOS CURSOS  
DEL JAPONES (1971/72—1983/84)

Curso	Alumnos oficiales		Alumnos libres	
71/72	Nivel A	30	Nivel A	1
72/73	Nivel A	23		
	Nivel B	23		
73/74	Nivel A	29	Nivel A	4
	Nivel B	9	Nivel B	3
	Nivel C	13	Nivel C	1
74/75	Nivel A	27		
	Nivel B	4		
	Nivel C	8	Nivel C	1
	Nivel D	3		
75/76	Nivel A	28	Nivel A	1
	Nivel B	6	Nivel B	1
	Nivel C	5		
	Nivel D	4		
76/77	Nivel A	25		
	Nivel B	4	Nivel B	1
	Nivel C	4		
	Nivel D	3		
77/78	Nivel A	26	Nivel A	3
	Nivel B	11	Nivel B	1
	Nivel C	4		
	Nivel D	1		
78/79	Nivel A	31	Nivel A	1
	Nivel B	7	Nivel B	1
	Nivel C	8		
	Nivel D	2		
79/80	Nivel A	23	Nivel A	1
	Nivel B	12		
	Nivel C	6		
	Nivel D	5		
	C. A. P.	1		
80/81	Nivel A	31	Nivel A	1
	Nivel B	10		
	Nivel C	6		
	Nivel D	2		

81/82	Nivel A	33		
	Nivel B	13		
	Nivel C	4		
	Nivel D	5		
82/83	Nivel A	31	Nivel A	2
	Nivel B	12	Nivel B	2
	Nivel C	11	Nivel C	1
	Nivel D	1		
83/84	Nivel A	30		
	Nivel B	14		
	Nivel C	11		
	Nivel D	7		
Total		606		27

明書」の取得だけを目的とする人などは、libres として登録することになる。また、同一言語の同一学年を二度落第すると翌年度からは libres としてしか登録できないという規約があることを付け加えておく。

以上が、スペインに於ける日本語教育史である。次に、各機関毎にその実情について報告したい。

## 2. マドリッド・アウトノマ大学 (Universidad Autónoma de Madrid)

現在スペインの大学(国・公立29校、私立4校、計33校)の中で日本語を開講しているのは、このマドリッド・アウトノマ大学だけである。大学の開校は1971年。同時に「アジア・アフリカ研究所 Instituto de Estudios Orientales y Africanos」も設立されている。一般にスペインの大学では、どの学部でも外国語を要求しているわけではなく、必修の場合でも第一外国語だけのところが多い。外国語教育は、義務教育課程(E. G. B. 前期5年、後期3年)の後期に導入され、高等学校(B. U. P.)、及び、大学入学予備課程(C. O. U.)でも続けられる。入学試験にも外国語がある。現在、そのほとんどは英語であるが、十年前には、まだフランス語のほうが多かったように記憶している。現在、この「アジア・アフリカ研究所」

には、ロシア語・ベルシャ語・ポーランド語・中国語・日本語・ブルガリア語・フィンランド語・トルコ語・古スラヴ語の計9言語が設置され、11名の教員がいるが、いずれも専任ではない。ちょうど、早稲田大学に於ける語研のように、学生たちは聴講料を払わなくてはならないが、年額約1万6千円。また、ここでの単位は、文学部では第二外国語として認められるが、他の学部では卒業に必要な単位としては認められない。前述のように、1971年の大学創立以来、しばらくの間、この「アジア・アフリカ研究所」で日本語の授業が行われていたのだが、途中で中断のうき日にあったようで、現在の講座は、実は、1985年に始まったばかりである。日本大使館の柴田文化担当書記官の話では、日本サイドとしては、ここを、ゆくゆくはスペインに於ける日本研究の中心にしたいという考えがあるようで、国際交流基金から日本人講師が派遣されている。

- 1) 学生数・クラス編成：アウトノマ大学の学生18名、及び、特殊聴講生1名の計19名。昨年度は1クラスのみ。
- 2) 期間：1回1時間、週4日で3年間。いずれは1回を1時間半に、そして、3年間で5年間にしたいとのこと。
- 3) レベル・目標設定：1年次では、平仮名・片仮名、及び、教育漢字のうち小学校1年生用の76字を導入。語い数は500語を目指しているそうだが、日本人講師の話だと、100語もはいつているかどうかというのが実情らしい。文法的には、命令・禁止の表現や「～のに」「～から」といった従属文あたりまで。2年次では、教育漢字のうち小学校2年生用の145字と3年生用のものを一部分。また、語いは1500語が目標。3年次では、教育漢字の残り全てを与え、語いは3000語が目標。
- 4) 教授法：基本的には、会話文から入り、文法等の説明の後、会話式的実践練習をする。また、1・2年次で基礎文法を終え、3年次では講読と作文を中心とする。

- 5) 教材：Ramiro Planas/Juan Antonio Ruescas 著 「Japonés Hablado」 Omnivox 社 これは、ローマ字表記であることが利点だが、カセットもなく、また、例文に人工的で不自然な感じのものがかなりあるようだ。使用語いは約1万1千語。1986年度からは、日本スペイン協会編「たのしい日本語」を使用する予定とのこと。また、国際交流基金の「日本語初歩」を使いたいのだけれどローマ字表記でないため、これを日・西2カ国語版にする作業を進めているとのことだった。
- 6) 教員：フエルナンド・ロドリゲス・イスキエルド (Fernando Rodríguez Izquierdo) 49歳。セビーリャ大学卒。文学博士。専門は俳句を中心に日本文学の研究と翻訳に従事。最近では、井原西鶴の「好色一代男」の翻訳がある。かつて、3年間日本に留学。現在、「アジア・アフリカ研究所」の所長も兼務している。  
林 はる芽 32歳。東京大学卒。学習院大学大学院修士課程（中退）。日本語教育学会・国際交流基金研修課程・早稲田大学語学教育研究所日本語教育公開講座等を受講。海外での日本語教育経験は中国で2年間。
- 7) 受講理由：ほとんどは日本企業への就職を考えてというもの。他には、恋人が日本人だからとか、かつて日本で生活したことがある、または、観光で行ったことがある等。
- 8) 問題点：開設して間もないため、様々な問題を抱えているが、例えば、まず、教材や参考書などの不足があげられる。また、実は、ここにはLLの施設さえない。VTRの機材を申請したところ、テープもないのに買っても意味がないと、あっさり大学本部で却下されてしまったという。現在は、大阪万博基金という団体が半額を援助してくれるそうで、残りの半額を出してくれるよう、大学当局に申請中とのことであった。また、前述のように、日本側に

はここを将来、日本文化研究センターにしようという考えがあり、スペイン側もロドリゲス・イスキエルド氏を教授 (catedrático) として認める意向を示したそうだが、その正式の任命が未だに政府公報 (Boletín Oficial del Estado) に発表されず、宙に浮いたままになっている。教育の実際面では、ZA 行の発音が SA 行になってしまうことや、「ん」がうまくいかないといった話を聞いた。

### 3. 国立語学学校マドリッド校 (Escuela Oficial de Idiomas de Madrid)

国立語学学校は、前述のように、職業専門教育のなかに位置付けられており、1985年度には全国に14校があったが、1986年度には新たに10校を認可する予定になっていた。また、現在15ある地方自治政府のうちガリシア・バスク・バレンシア・カタルーニャ・アンダルシアの5つは、自らの管轄下に、公立の語学学校を擁している。また、スペインの EC 加盟に伴い、例えばこのマドリッド校では、それまで設置されていなかったデンマーク語・現代ギリシャ語・オランダ語が開講され、更に、地方自治制の施行に伴い、カタルーニャ語・バスク語・ガリシア語も開講された。ちなみに、現在設置されているものは、ドイツ語・アラビア語・中国語・デンマーク語・フランス語・ギリシャ語・英語・イタリア語・日本語・オランダ語・ポルトガル語・ルーマニア語・ロシア語・カタルーニャ語・バスク語・ガリシア語・それに外国人対象のスペイン語の計17言語である。

日本語は、前述のように1975年に開設。当初は3人(スペイン人1名、日本人2名)のスタッフがいたが、現在は2名である。

- 1) 学生数・クラス編成：1年次・3クラス/97人(うち libres 4人) 2年次・1クラス/19人(うち libres 2人) 3年次・1クラス/18人(うち libre 1人) 4年次・1クラス/6人

5年次・1クラス/7人 計7クラス/147人

- 2) 期間：1コース10カ月。1日1時間、週5日（月曜日～金曜日）  
正式には1～4年までであるが、「技能証明書 Certificado de Aptitud」の取得が難しいため、その準備のために特別なコースがあり、それを5年とか特別4年とか呼んでいる。これは、本来のものではなく、非公式であるが、スペイン語に限らず、また、このマドリード校だけのことではない。
- 3) レベル・目標設定：1・2年次（プラナス氏担当）では、日本語の一般的概念を捕らえさせることを目的とし、3～5年次（近藤氏担当）では、音読―矯正―翻訳（文法的把握の徹底、例えば、主語の取り違い等）を主体とする。1年次は、ローマ字表記で約3カ月を過ぎた頃に片仮名・平仮名を導入。漢字は約100字を導入するが、学習は強要しない。文法的には、「Japonés Hablado」の1～23課。語いはその13課までの約800語を要求。2年次では、漢字約250字。文法的には、「Japonés Hablado」の24課～44課。語いはその22課までの1500～1800語。3～5年次では、漢字は学生の自習にまかせ、また、語いは1～2年次のものの徹底を図る。
- 4) 教授法：上記の目標設定からも推測できるように、プラナス氏と近藤氏との連携がうまくいっていないようで、感情的な対立すら窺われた。プラナス氏は、1～2年次では会話主体の教え方をしていると言われるが、近藤氏に抛れば、これも文法主体でしかないということになる。また、漢字を例にとれば、プラナス氏は3～5年次でもそれぞれ約250字を導入し、教育漢字を全て終えたいとしているが、これも、学習計画上の希望的示唆に止まっている。
- 5) 教材：1～2年次 Ramilo Planas/Juan Antonio Ruescas 著「Japonés Hablado」Omnivox 社。また、1年次では「日本語初

歩」，2年次では「日本語読本1（19課まで）」を併用。3～5年次では，筑波大／大阪外語大／国際交流基金などのものを併用。

- 6) 教員：ラミロ・プラナス（Ramilo Planas）54歳。上智大学神学部卒。近藤仁之 55歳。早稲田大学第一商学部卒。同大学院経済学専攻修士・博士課程。経済学博士（マドリード・アウトノマ大学）。両氏とも，日本語教員資格はないが，国立語学学校の教員になるには独自に試験があり，勿論，両氏ともその試験をパスしておられる。
- 7) 学生・学習目的：社会人と大学生が半々。年齢は10代の終わりから20代前半が主だが，中には65歳過ぎの人もある。受講動機としては，社会人の場合には，職業との関連（主として技術系）が多い。65歳過ぎの人は定年退職をして年金生活をしている人で，語学好きで，言わば，趣味。他には，日本へ行ったことがあるとか，これから行きたい。空手や書道などを習っている。恋人が日本人。国立語学学校での空き時間を埋める為等。
- 8) 問題点：最大の問題点は，担当者間の意志疎通や，連絡の欠如にあると思われる。これは，詳しく立ち入るべきことではないので，その指摘をするに止め，以下，両氏の意見を具体的に個条書にする。1. 日本で出版されているテキストの大半には，教師用のマニュアルがない。2. 学生のレベルの差が大きい。3. 1～2年次で文法ばかりやっている為，会話力が無視され，カリキュラムのバランスが悪い（近藤氏）。4. 学生の態度も，会話力を無視し読解力にのみ集中している。但し，それも和文西訳のレベルであって，西文和訳ができない（近藤氏）。5. これに関してプラナス氏は，1年次には目新しさや物珍しさ，また，初期特有の意欲などから，学習態度も熱心だが，2年次になると，他の言語（大抵の学生が複数の言語を同時に学習している）の場合と比較

して、進歩の度合いが遅いことに失望するケースが多いと指摘している。具体的には、余り話せないということらしい。6. 日本語を活用する場がなく、その為に、動機が強力なものとならず、従って、効果もあがり難い（プラナス氏）し、また、会話力無視の態度として現れている（近藤氏）。そうした必要性のなさが、漢字は言うに及ばず語いの貧しさに直結する。つまり、初めから覚えようとしない。7. 現在スペインに進出している日本の企業も、スペイン人を雇用する際に英語力のみを要求しており、従って、日本語を学んでもそれが就職等に結び付かず、出口なしの状態にある。これが、会話力無視の態度を一層強化する役目を果たしている側面がある（近藤氏）。8. こうしたことから、近藤氏に拠れば、厳密な意味では、上級クラスでもそれに相応しいレベルは要求できないし、もしそうしたならば、まずほぼ全員が落第し、学生がいないという事態すら生じかねない。9. LL を利用したくとも現在ある3教室は、ほとんど常に英語にとられ、たまに割り込めると、今度は器械の故障があったりで、実際には利用できずにいる。

#### 4. 国立語学学校バルセロナ校 (Escuela Oficial de Idiomas de Barcelona)

前述のように、日本語科の開設は1971年。現在日本語教育を実施している公立機関のなかでは、最も古い存在である。開講以来、松浦氏が唯一人の教員として頑張ってきたが、1984年から白石氏が加わり、現在は2名である。このバルセロナの国立語学学校では、ほとんどの言語が、いわゆるコミュニケーション・メソッドを採っている。特に、スペイン語科では、担当の先生方がチームを作り、こうした教授法の研究と実践の成果を「Para empezar」「Esto funciona」という教科書として出版している。現在、様



々な語学教育機関で多く用いられている2種類の教材の中の1つがこれである。日本語科に関しても、他の機関に比べ、こうした関心が強いように思われた。

- 1) 学生数・クラス編成：1年次・3クラス／90人 2年次・2クラス／53人 3年次・1クラス／12人 4年次・1クラス／8人
- 2) 期間：1コース10カ月。1日1時間、週5日（月曜日～金曜日）
- 3) レベル・目標設定：平仮名は1年次の第2～3週目から導入し、以後、板書は全て平仮名で行う。片仮名は1年次の半ばから導入する。（但し、松浦氏に拠ると、平仮名に比べ徹底が不充分。）漢字は、1年次で70～80字を導入するが、特に、漢字のテストなどをするわけではない。但し、導入後は、試験問題なども漢字・仮名混じりの普通の文を用いる。4年間の全コースを通じて、教育漢字全てを学習させることは無理で、せいぜい400～500字といったところ（松浦氏）。しかし、白石氏に拠れば、4年次生でも100字入っているかどうか疑問とのことであった。
- 4) 教授法：主として会話表現から入る。遊びの要素を多く取り入れている。例えば、双六をするが、進んだところで質問をし答えさせる。よく知られている人物について記述させ、クラス全員でそれが誰かを当てさせる。2人1組のペアを作り、この2人が取り調べを受ける犯人探しゲーム。これは、この2人がアリバイを考え、1人ずつ教室に入り、クラス全員から質問を受け、2人の供述に食い違いが出たら、このペアの負けというもの。LLは、2週間に1度くらいの割合で、授業に組み込まれている。主として、授業で問題のあった個所を集中的に扱う。VTRは約40本を所有。使い方は、例えば、1年次の場合、「これは～です」を用い、まずテキストなしで2～3回見せ、次に各フレーズを聞き取らせる（ディクテーション）。テキストを与え、読ませた後、ポイン

トを空欄にして穴埋めをさせる。最後に、アフレコをさせる。2年次では、「～しています」を使い、シチュエーションだけを与えて会話を作らせ、グループ毎に発表させる。但し、このとき、原稿を読むことは許さない。

3年次のクラスを見学したが、それは8枚綴りの絵を用いて作文をさせるというものであった。絵の内容は、1枚目：雪ダルマ、もみの木、雪が降っている。2枚目：温度計（0度をさしている）と人物（男性）。3枚目：タンスからオーバーを出し、着ているところ。4枚目：地下室に下りて行くところ。5枚目：薪をとる。6枚目：暖炉に火を付ける。7枚目：オーバーを着たままソファーに座り、テレビを見ている。8枚目：温度計（20度）。黒板に「ゆきだるま・おんどけい・ようふくダンス・もみ（もみのき）・まき（たきぎ）・だんろ・もやす・ちかしつ」という単語を板書。まともなストーリーを作れたのは一人だけだったが、これは、三島由紀夫の小説の翻訳は全て読んだという熱心な女子生徒で、飛び抜けた存在であった。他の生徒たちは、スペイン語からの直訳や干渉が顕著で、「寒いなあと思いました」の意味で「寒いねえと思いました」と言ったり、「そこ（地下室）で」のつもりで「あそこで」を使ったりしていた。また、「階段」の代わりに「梯子」といった生徒がいた。その都度、松浦氏が間違いを指摘して正しい用法を教えたり、単語の違いを説明していたのは、改めて言うまでもない。

- 5) 教材：1年次・「Intensive course of japanese Vol. 1（途中まで）」「ひらがな・読み方 Vol. 1」 2年次・「Intensive course of japanese Vol. 1（続き）及び、Vol. 2」「蜘蛛の糸」「二十四の瞳」などを易しくしたもの。3年次・「Intensive course of japanese Vol. 2（半ばまで）」「一房のぶどう」や詩など。4年次・

「Japanese elementary」「雪女」「向田邦子の作品」新聞や雑誌の記事を易しくしたもの等。

- 6) 教員：松浦惇一 41歳。英知大学スペイン語科卒。専門はスペイン語，スペイン文学。日本語教員資格はない。白石実（まこと）38歳。多摩美術大学卒。専門は油絵，陶芸。日本語教員資格はない。但し，普通教員免許を所有。この国立語学学校に入る前は，バルセロナの日本人学校で教員をしていた。
- 7) 学生・学習目的：年齢は平均23～25歳。社会人の方がやや多い。受講動機としては，日本に対する興味。日本の企業で働いている。恋人，配偶者が日本人。日本人の友人がいる。変わった言葉を習ってみたかった。
- 8) 問題点：松浦氏は，この国立語学学校がコミュニケーション・メソッドを採用していることを踏まえた上で，日本語の教授法が遅れていると指摘している。Notional/Functional などをやってみただけけれども言っておられた。また，テキスト，特に，読本によいものがないとのこと。一般的なレベルでは，生の日本語に接する機会がなく，学校の喫茶室で日本人学生と会話を試みたりはするのだが，彼らはスペイン語で話したがるし，学生たちも，最後にはスペイン語での会話にいつてしまう。また，いわゆる語学向きの人とそうでない人の差が，1年次の半ばからはっきりしてきて，そのレベル差がネックとなる。ただ，学生たちは，日本語は大変に難しいものと思って入ってくるので，場合によっては，1年次を終えた時点で，思ったよりも難しくなかったという感想があったことさえあるという。

これが，筆者が見てきたスペインに於ける日本語教育の全てである。専門家ではないので，聞き落としたことなども多いかと思うが，その点は御

容赦願いたい。最後に、快く質問に答えて下さった諸先生方や、関係者諸氏、特に、「東雲」を探して下さったラミロ・ブラナス氏と「覚書」を下された松浦淳一氏に、深く感謝したい。尚、「東雲」も「覚書」も筆者の手元にあるので、関心がおありの方は御連絡願いたい。今後の日本語教育のため、役に立つところが多いものと思う。但し、いずれもスペイン語であることをお断りしておく。